

《隠謀学》入門Ⅱ

～隠謀学的推論の基礎について

村 岡 潔

〔抄 録〕

本稿は、前回の隠謀学入門を受けて、その続編として執筆した。最初に、前回のまとめとして隠謀学の定義を簡単にまとめた。ついで、隠謀学的推論の基礎として、まず、「イベント」の単純パズル化について解説し、次に、隠謀学的営為においては等身大の思考が重要である旨を示唆しつつ、「隠謀学的サーブ権」について言語学的な観点から解説した。最後に、コジコジとジョージ・ムーンを取り上げ、隠謀学的等身大の生き方について若干のコメントを述べた。

キーワード：隠謀学，隠謀学的推論，「最大要素」化，隠謀学的サーブ権，等身大の生き方

「お前は秘密を漏らした。逮捕する」

「何の秘密を？」

「それは秘密だ。私は知らぬ。」

秘密保護法のオーウェルの世界。

(『朝日新聞』「素粒子」2013・10・26 朝日新聞大阪本社版夕刊)

(1) 〈隠謀学〉とは

前回「隠謀学入門」¹⁾(以下、これを「入門Ⅰ」とします)では、「隠謀」とは、すなわち、「ある目的を達成するために秘密裏の計画を立てること」であり、その目的は「小説・演劇・映画などの物語を構成するような一連の出来事」、言い換えれば、「人生や生活上の様々な出来事」を計画者の利害関心に沿った形で実現するためのアプローチを指し、幼児がつくたわいもない嘘も「隠謀(プロット)」であり、医師ががん患者にがんと異なる病名を告げるのも「隠謀」的アプローチと紹介しました。いずれも、相手を何らかの形で欺くことによって自己の本

懐を遂げようとする目的があるものだからです。

また、「隠謀学 plottology」（筆者の造語）は、この世の日常茶飯事に満ち溢れている数々の隠謀（プロット）を解説するための一種の論理学であり、行動科学であり、文化的解剖学（アナトミー）であるとも紹介しました。「金儲けの話」「健康食品」などのうまい話、さらには、日常生活でよく見かけるCMもどこかに隠謀の可能性を秘めており、隠謀学は、それらの罫を見抜き、よりよく生きるためのものであると結論しました。本稿で言う隠謀学は決して、それを「悪用」して隠謀力を増進するためのものではありません。

初回は、日常生活の事象を隠謀学的アプローチ（手法）でとしての解釈が可能なパターンを提示しましたが、今回は、それをもとに諸事象の原因・意味づけを推理・推測する「隠謀学的推論（guess, inference, reasoning）」についていくつか考えて検討してみましょう。

（2） 隠謀学的推論の基礎 ～「イベント」の単純パズル化

前回「入門Ⅰ」では、隠謀学の生物学的基礎として私たちの認知は「一種の文化的色眼鏡」による世界の解釈なので、決して外界それ自体（物自体）を見ているわけではないことが出発点であることを指摘しました。つまり、人はつねに「錯覚」準備状態にあり、知覚が切り取ってきた世界のイメージの欠如部分を補正する能力に長けた結果〔安斎育郎〕が裏目に出る（「見え」すぎる）ことにもなるわけです。人間が世界そのものを認識しているわけではないのに認識していると信じる「錯覚 illusion」相手の「誤読・別読」を巧みに導入する「隠謀主義 plottism」の説明も行いました。

今回提唱する「隠謀学的推論」の目的は、隠謀主義的作法のアナトミー（文化的解剖）を通じて、その背景にある「真実」を構成する（構築する）ことです。それはまさに、マジック（手品・奇術）のトリック（種）を暴くような営為に類似しています。ただし、マジックは、決まったストーリー（すでに構築された台本）の中で展開されているので、トリックの解答は1つか複数でも若干数と考えられるでしょう。それに対して、隠謀学的推論は、現在でも評価の定まらない事象の謎解きの形態なので、解はさらに多くなりえます。

例えば、隠謀学的推論のトレーニングとしては、TVのサスペンスドラマ（探偵もの、刑事もの）などをたくさん視聴することがお勧めです。それはもうやっているという読者も少なくないでしょうが、やり方にもコツがあります。

まず、時間の節約のためにくだんの番組を録画し、それを2倍速で再生します。これで準備完了です。ドラマを開始したら、できるだけ早く犯人を指摘し、ドラマの最後で正解を確認します。開始直後の出演者のテロップだけであてることができるようになれば、隠謀学的推論の初歩的トレーニングは完了です。ドラマでは、悪役の役者たちがどのような表情やしぐさを示すかを見落とさずにチェックすることが肝心です。

特に、慣れない人が罪を犯そうとすると不自然な態度・表情を表します(ドラマでは、役者がそれを故意に示そうとしますから余計に目立ちます。また、日本のドラマだと犯人が分かりやすいので「コールドケース(米国版「お宮さん」)」のような海外ものもお勧めです。)

つまり、隠謀学的推論は、世界の現象の一部分を切り取ってきて、それをヒントに解釈した世界像(解答)を構築するという作業です。いわば、パズル遊びに例えれば、一から数個のピースをもとに世界という全体像を推測するようなものです。これは、あくまで言語ゲームの一種ですから、法律で立件するときのような厳密な証明は不要です(無論、隠謀学的推論は反証にも使います)。むしろ、世界が様々に解釈できるという点を示すうえで意義があります。勿論、このような場合でも一つにしか解釈できないこともあります。

例えば、1941年12月8日、日本の艦隊から飛び立った飛行機が、真珠湾を攻撃した時の逸話では、米軍の艦隊のいる軍港の建物に当時非常に貴重であった総天然色(カラーフィルム)の撮影機をもったカメラマンが居たという「イベント(事件・出来事)」があったとされています。ふつう、それは偶然とみなされるでしょうが、隠謀学的推論では、人類学という災因論などと同様に、偶然という「意味が全くない事象」はあり得ないという立場に立ちますので、何らかの目的があってそこにいたということになります(あるいは、そのようにします)。

さらに、ハワイの真珠湾は、言ってみれば鹿児島湾(実際にここでは真珠湾攻撃の模擬演習が行われた)あるいは南樺太の大泊港のような中央から離れた所にありますから、つまり撮影隊は、何か特別なイベントを撮影するためにそのような辺鄙な場所に、特別なフィルムを持って待機していた可能性が高いのです。この場合には、そのイベントとは「日本軍の真珠湾奇襲攻撃」ということになります。それは、この事件がこの時最大のものであったし、また、話として一番面白いものになるからです。なぜ、待機できたのかというと米軍は日本軍の暗号を解読し²⁾、奇襲攻撃を前もって察知していたからという隠謀学的推論に至ります。さらに、真珠湾の米国太平洋艦隊にはいるはずの空母が全くいなかったことも隠謀学的推論の後押しになります。また、カラーフィルムの持つ意味は、広島に原爆を落とした直後何日かでやってきた米軍がここでも貴重なカラーフィルムで被災地広島を撮影したという点からも示唆されるところです。彼らにしてみれば世界初の原爆の「成果」を克明に記録する必要があったからでしょう。

この例では、「特別なフィルム」、「辺鄙な場所」、「空母が全くいなかったこと」などがイベントのパズルを解く3つのピースなのです。一般的な論理学(あるいは、常識)ではこのような推論は、飛躍が多いとして、採用されないでしょう(強弁すると、オカルトの類とラベリングされるでしょう)。しかし、隠謀学的推論では、言語ゲームですから、それで構わないのです。このために事象を単純化することが、隠謀学的推論には不可欠です。これを事態(あるいはイベント)の「大要素」化と呼ぶことにします。

この推論は、筆者が近年、「昆虫型戦略 entomological strategy」(以下、e 戦略)と呼ぶもの³⁾にも類似しています。動物行動学的には、昆虫は、それ自体非常に完成された生物(精巧

なロボット）で、生来の能力〔本能〕で各瞬間を場の判断で切り抜けていくことが可能です。一日の行動も非常に確実で、関心があるものしか知覚しないですむような身体構造なのです。まさにスマホで、関心ある情報をパッパッと、あるいはサクサクと選択して行ってあっという間に目的に到達できるような現代的システムも昆虫化しているわけです。

また、楽しく隠謀学的に推論することで世界が違ったイメージになってくることが起こりますし、偶然から必然へと変態する世界で楽しむこともできるでしょう。例えば、「今朝、家の水槽でナマズがいつもと違う動きを見せたので地震に備えた」と言えば、ナマズの地震予知能力は科学的に証明されていないという批判もすぐに出るでしょう。しかし「そんな理由で（あるいは別の言い訳で）会社を一日休み、のんびり過ごす」のはメンタルヘルスにとってはよいかもしれません。しかし、ナマズでなくとも、人間以外の動物が捕食者だけでなく、地殻の変動や天候の変化に人間よりも敏感であるという言説は、隠謀学的推論では、パズルのピースの一つになりうるのです。それは、将棋や碁で相手の一手を読むのと類似しています。その効用は、環境の異変に先手を打って素早く対応するサバイバル能力を高めることにも通じています。一方、こういう言語ゲームは楽しんでやることが重要で、さもないと杞憂の塊となり、不安神経症にもなりかねませんので。

（3）「等身大の思考」と隠謀学的サーブ権

第2節述べたように、隠謀学的推論で世界を単純化した後は、等身大の思考が不可欠となります。隠謀学的推論でイメージしたイベントの謎解きは、それがすべてではないはずという前提にたって、背伸びをせず自分の守備範囲の考え方で対処することが隠謀学では重要になります。

D・デヴィッドソン流に言えば、言語（発話も含め）は、言葉が表示する意味内容が真実であるということが前提になっています。そうでないと、ウソをついたり、隠謀を働かししたりすることができないのです。「僕は君を愛している」あるいは「10年後にカブールの都で再会しよう」などと言えるのは、「僕」「君」「愛する」「10年後」「カブール」「再会する」などの言葉の意味が両者に共通だからです。これが同一言語をしゃべるときのルールです。

隠謀を謀るものはこれを逆手にとっていることは言うまでもありませんが、これを発する側のほうが聞く側よりも優位に立っていることはよく忘れられています。

言葉は発せられると同時に、聞き手を何らかの形で何らかの程度に拘束します。発話者の世界に引き込まれて何か反応しなくてはならないはずで、「愛している」と言われたら、聞き手は話し手に何か答える「義務」が生じます。「10年後に会おう」でも同じです。イタリアにも、挨拶はエチケットで返礼は義務という言い方があります。（たとえ、うまくはめられても、相手の意図を「大要素化」して等身大で対処することにより、やすやすとは飲み込まれないよ

うにすることもできるでしょう。)

このことは、隠謀学でいう「言葉のサーブ権」という問題につながっています。言葉のサーブ権とは、テニスなどのスポーツのサーブ権からもじったものですが、サーブ権をもった方がレシーブ側より強い傾向があることを示しています。例えば、口頭試問でも筆記試験でも、あるいは面接でも、質問者(出題者)側が強いのはサーブ権を持っているからだと言えます。この場合、レシーブ側は、相手の意図を少ないピースに大要素化し、そこから再構築(イメージ化)し対処することを迫られます。そして、サーブ権を有する出題者をいかに満足させることができるかが勝負になります。

この場合、隠謀学からのサジェスションは、テストでも口頭試問でも、一種の言語ゲームとみなすべきだということです。そこで何か普遍的な「真実」を語るとか、あるいは「本当の自分」を見せたいとか思わないことが重要です。隠謀学でいう等身大で対処するということは、まず「本当の自分」などというものがないと認識することだからです。いわば、私たちは常に対象や環境に応じて、あるいは年齢に応じて「変態 (metamorphose)」しているだけなのです(諸行無常)。むしろそれを楽しむべきです。

もう一つ、隠謀学からのオススメは、等身大対応として、あるいは、言語ゲームとして相手の「サーブ権を奪い返す」ことでしょう。筆者が若いときに、(必死で無い知恵を絞ったというより、とっさに出た行動ですが)等身大に対応しつつ、サーブ権を奪ったケースがあります。国連英検の二次試験(口頭試問)の時に、試験官の外国人女性から英語で「the greenhouse effect」についてあなたはどうか考えるかと質問されました。とっさに意味が分からず10秒ほどで「温室効果」だと気づきましたが、うまく説明の単語が浮かびません。そこで、思わず「あなたはどうかお考えですか?」と試験官に質問してしまいました。

サーブ権を奪った瞬間です。我ながらオキテ破りと思いましたが、先方は、地球温暖化につながるので炭酸ガスを減らすべきだと答えてくれました。そこで筆者は「私もそう思います」と答え短い諮問は終わりました。なぜ試験官が答えたのかは謎ですが、おそらく質問に関しては答えるべきだという英語的文法上の関係(「質問によって返事は義務」的な文脈が形成される)からなのか、このやり取り自体を会話とみなしたのか、定かではありませんが、結果は合格でした。

(4) 「隠謀学的等身大」に生きよう ～コジコジ風あるいはジョージ・ムーア風～

等身大にとは隠謀学的には、例えばさくらもこの90年代半ばの作品『COJI-COJI』⁴⁾の主人公コジコジの生き方に学ぶことでもあります。コジコジは、変わった登場人物からなるメルヘンの国の小学校へ通う「神か天使か、はたまたバカか」という、空も飛べるナゾの生命体

であり、常識は通用しない（知らない）、空気は読めないで皆からばかにされているが憎めない主人公です。いろいろな規則・システムをもつ世間に対して「無辜」な態度で思ったまま生きています。そのため、かえって他（スージーは除く）からだまされることもないし、仮に騙されてもそのことを全く意に反さないキャラクターなのです。隠謀学的には、一種、理想的な存在と言えるでしょう。

また、サマーセット・モームの短編小説『この世の果て』⁵⁾の主人公のジョージ・ムーンも実は等身大の生き方を示しています。

主人公のムーンは、英国領の南洋諸島の事務官ですが、その退官の前日に、知り合いのトム・サファリーが相談にやってきます。それは、妻のヴァイオレットがサファリーの親友のノビィ・クラークと許されざる恋をしていることを知って、妻を離縁すべきかどうかという相談でした。ノビィには仕事を世話をやっかし、ヴァイオレットは家政婦だったところを妻に迎えてやったのに二人とも恩知らずだとなじります。それに対して、サファリーは、ムーンが、疑いもなく白黒がはっきりしていると思われる事柄に奇妙な答え方をするので戸惑ってしまいます。ムーンは言います：

「ああ、それはねえ、人は感謝報恩を期待すべきではないのです。誰もがそんな権利は持たないものです。結局、人はそれが喜びを与えてくれるからよいことをするのです。それはある限りのもっとも純粋な形の幸福というものです。それに対する感謝を期待することは、多くを望みすぎることになります。もし、それを得たとすれば、そうだ、人がすでに割りあてを得た以上に出るボーナスのようなものだ。それは素晴らしい。しかし、それを当然受け取るべき分け前だと考えてはいけないのだ。」と。

ムーンは、最後に微笑しながら「事実と顔つき合わせて考え、それがたとえ不快であっても腹を立てず、人間性というものをあるがままに受け取り、それがばからしいときには笑い、悲しいときには誇張なしに悲しむことが皮肉屋（シニカル）だというのなら、たぶん私は皮肉屋でしょう。大体が人間性というものは、ばかげていて悲しいものですよ。しかし、もし人生が君に寛大ということを教えたならば、人生には泣くことよりもむしろ笑うことの方が多いのがわかると思いますよ。」と諭します。

このあたりのくだりがまさに、隠謀学的な等身大の生き方なのです。

最も優れた人たちの苦勞

どんな仕事をしていますかと、聞かれて、コイナさん答えた。
『とても苦勞しています。次の間違いの準備をすすめています。』

（B・プレヒト『コイナさん談義』⁶⁾）

〔註〕

- 1) 村岡 潔「《隠謀学》入門」佛教大学社会福祉学部論集, 第9号, 2013年, 137-146頁
- 2) NHK スペシャル『日米開戦への道 知られざる国際情報戦』(再)(2013年12月12日放映)
- 3) 村岡 潔, 「知のダイエット」に関する試論(1) 大学教師はいま学生に何が与えられるか?, 佛教大学福祉教育開発センター紀要, 2013年
- 4) さくらももこ『COJI-COJI』1, ソニーマガジンコミックス, 1996年
- 5) S・モーム短編集(増野正衛訳)『この世の果て』1960年, 75-128頁
- 6) B・プレヒト「コイナさん談義」, 長谷川四郎, 他訳『プレヒトの小説』河出書房新社, 1972年
302頁

(むらおかきよし 社会福祉学科)

2013年10月31日受理